

本論文は、Thomas More, *Utopia* の舞台となる島が、従来考えられてきた南アメリカではなく（当時の地理上の知識における）アジアに位置づけられていたことを、原テキストの細部の読解と、当時の地理学に関する近年の研究成果に基づいて論証するだけでなく、なぜ More が *Utopia* をアジアに位置づけたのかについても、彼が携わっていた「Erasmus 的改革」の擁護という具体的な理由を推定し、More と Erasmus を取り巻く当時の神学者・人文主義者たちの思想動向を丹念に読み込みながら、この推定の正しさを立証している。さらに本論文は、こうした位置づけが More によって慎重になされていたことを根拠として、*Utopia* は本来フィクションではなくノンフィクションとして（実在の未知の国の記録として）書かれていたと主張している。

*Utopia* という古典中の古典について、刊行時の世界観・歴史観・宗教観と結びつけて再解釈することで、テキストの解釈を一新させる可能性のある大胆な議論を、概して堅実な論証に基づいて展開している点が、編集委員会で高く評価された。

もっとも、この新しい知見を元に *Utopia* 本文の読みがどう広がるのか、という点についてはさらに分析が必要と思われる。また、*Utopia* がフィクションかノンフィクションかという点は、本文と関連テキスト（関係者の書簡等）に様々な言及・仕掛けが施されており、これまでも議論があったので、過去の議論を踏まえてより慎重に検討することが望ましい。全体的に論調が断定的すぎる点も、改善の余地があるだろう。

しかし、こうした問題点は、本論文の独自性と有益性を本質的に損なうものではない。以上の理由から、編集委員会での慎重な審議を経て、本論文に優秀論文賞を授与することとなった。

2011年に始まった優秀論文賞は、『英文学研究』に掲載されたすべての論文（ただし新人賞関連の論文は除く）から、特に編集委員の評価の高いものに授与される。2016年刊行の英文号まで、ほぼ毎年1本ずつの論文に授与されてきたが（もっとも、規程上は同年に複数の論文の授賞もありうる）、その年を境に優秀論文賞の授賞がしばらく見られなかった。しかし、『英文学研究』と日本英文学会にとって、優秀論文賞は新人賞に劣らず重要であり、毎年授賞について真剣な議論が交わされてきた。そうした中、第100巻という節目の号で再び優秀論文賞を出すことができたのは大変喜ばしい。

今後も英米文学研究・英語学・英語教育学の発展を促すような、清新にして説得力に富む論考の投稿を期待したい。